

○兄は謠ひ姉は縫ひ私は

海近い山遠からぬ御すまひのさま、おもしろき御繪葉書、嬉しく拜見候。かの門のあたりに幼き君の遊び給ふさま、見るやうに、はた御聲もきくやうにおぼえ候。こなたこの兩三日秋の氣色となり申候。けさは又降り出でわびしさ堪へがたく、夏は何處にか避暑にまゐり候ことゝ存候。

新井様いまだ御とまりにや、宜しく御傳へ願上候。まづは御答かたぐくかしこ。

只今、

兄はかなたの部屋にて「甘泉殿の春の夜の夢……………と謠ひる。

姉は小さき衣の袖をぬひる、

あつ子はトリハナクサと手習いたしる、

みづえ子は馬の首金魚など繪を畫きる、

末の子はつみ木をつみて遊びる、

北海道の伯母は昨日より泊りに参りゐて、今蓐を吸ひ烟の末をながめる、

正雄はハーモニカにてローレライをふきる、

扱最後に私は窓のもとにてかゝる文したゝめる候。

橘 糸 重 子

東京音楽學校教授橘糸重子の大磯にある人に送りたる

【入力者注】底本は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本…「手紙雑誌」第一卷第三號「名媛書翰」（有樂社）

明治三十七（1962）年五月二十日發行

入力…小林 徹

公開…令和六（2024）年二月十七日

橘糸重【散文作品集】に戻る。